

エジプト学研究第 19 号 2013 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2012 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 18 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一	15
第 3 期アメンヘテプ 3 世王墓壁画保存修復プロジェクト概報	吉村作治・西坂朗子・高橋寿光	43
アメンヘテプ 3 世王墓壁画に使用された顔料の化学分析	高橋寿光・西坂朗子・阿部善也・中村彩奈・中井 泉・吉村作治	59
アメンヘテプ 3 世の石棺蓋の保存修復作業概報	吉村作治・苅谷浩子・西坂朗子・高橋寿光	97
第 5 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	107
エジプト国家形成期の集落址調査－ヒエラコンポリス遺跡 HK11C における近年の発掘調査－	馬場匡浩	121
〈論文・研究ノート〉		
ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察－模倣と技術からみたその系譜－	竹野内恵太	135
〈卒業論文概要〉		
ナイル川下流域における石製容器からみた初期国家形成の様相 －先王朝時代から第 1 王朝時代を対象として－	竹野内恵太	151
古代エジプト・建造物の天井に残されたネクベト画像の考察	大橋陽子	159
〈活動報告〉		
2012 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		167
2012 年 エジプト調査概要		171
〈編集後記〉	近藤二郎	177

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

CONTENTS

PrefaceSakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2012, Project of the Solar BoatHiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Eighteenth SeasonSakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO and Shinichi NISHIMOTO	15
Report on the Conservation Work on the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22)Sakuji YOSHIMURA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	43
Chemical Analysis of the Pigments Used in the Wall Paintings of the Royal Tomb of Amenophis IIIKazumitsu TAKAHASHI, Akiko NISHISAKA, Yoshinari ABE, Ayana NAKAMURA, Izumi NAKAI and Sakuji YOSHIMURA	59
Report of the Conservation of Sarcophagus Lid of Amenophis IIISakuji YOSHIMURA, Hiroko KARIYA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	97
Preliminary Report on the Fifth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian ExpeditionJiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI	107
Excavating Settlement site in the era of Ancient Egyptian State Formation: Recent Excavations at HK11C, HierakonpolisMasahiro BABA	121
Articles		
Some Remarks on the early development of the Stone Vessels in the Nile ValleyKeita TAKENOUCHI	135
Summary of the Recent Undergraduate Theses		151
Activities of the Society, 2012-13		167
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2012		171
Editor's PostscriptJiro KONDO	177

古代エジプト・建造物の天井に残された ネクベト画像の考察

大橋 陽子*

Nekhbet Figures remained on the Ceiling of Monuments in Ancient Egypt

Yoko Ohashi

はじめに

両翼を上げたハゲワシの姿であらわされるネクベト女神の画像は新王国時代以降の神殿や葬祭殿、また王墓などの天井に多く見受けられる。王権を象徴するその形姿はどれも似通っており、同じような様式を呈するようにみなされてきたために、従来はエジプト学者たちの注意を惹くことが皆無であった。

しかし新王国時代の建築遺構で発見された天井画の断片からネクベト画像を復原しようと試みる際、きわめて形式的に描かれているようにうかがわれるネクベト画像に、果たして本当に時代による様式の変遷がなかったのかを探る網羅的な研究が、本来は求められるはずである。特にマルカタ王宮の天井画、及びアマルナで発見されたリントル部分に描写がなされているネクベト画像の復元作業においては、この基本的な問題の探求を欠くことができない。

本論文は執筆者によって可能な限り収集された写真資料に基づき、新王国時代以降の建築の天井に描かれる両翼を上げたネクベト女神画像の様式史を明らかにする。またアマルナにおいて出土したネクベト画像の復原案に関し、再考が必要である点を述べる。

第1章 ネクベト女神について

ハゲワシの姿によってあらわされているネクベト女神の名は、ネクベトを主神として崇拝した上エジプトの古代都市ネケブ（エル・カブ）に由来する。この章においては、主としてCapartによる報告書やHartmannの博士論文などを参照しつつ、先行研究の概略を把握することがおこなわれた。昔からこのエル・カブの地は、多くのハゲワシが飛び交う営巣地であったようである。上エジプト全土の都ネケン（ヒエラコンポリス）から、すぐ近い場所にネクベトの聖地ネケブが位置していたことは重要であり、注目されてよい。神話の上で、ネクベト女神は王の母としての役割も担った。ネクベト崇拝の始まりは王朝が成立する以前の先王朝時代にまで遡るのであるが、しかしどのような理由でハゲワシに対する信仰が生まれたのかなど、その起源に関して明らかにする史料を見つけることは困難である。

* 本稿は2011年度サイバー大学世界遺産学部における卒業論文（2012年2月提出）の概要を纏めたものである。

第2章 図像表現としてのネクベト女神

ネクベトは王権の守護、そして王と関わる役目を持つため、神殿や王墓、また王宮に多くの画像が残された。ネクベト女神の一般的に見られる姿としては、永遠を象徴するヒエログリフの「シェン」を脚のかぎ爪で掴み、大きく両翼を広げたハゲワシとしてあらわされる他、王を守るように片翼を前に出し飛んでいる姿、正面を向く姿、又横向きで立っている姿など、壁画にはさまざまな図像表現でネクベト画像が描かれた。

ネクベトが王の頭上で翼を拡げている姿は、初期王朝時代のナルメル王のメイスヘッドに見ることができ、玉座に座る王を天蓋の上から守護するように、この天蓋の上から両翼を拡げて王を守る姿が、後世において天井から王を守護する形へと変化していったのではないかと考えられる。ピラミッド・テキストでは、ネクベトは「ネケブに住む白き偉大なる雌牛」と呼ばれ、母性を表象する。またネクベトは古王国時代以降に上エジプトをあらわす白冠と結びつけられ、上エジプトのシンボルともなった。

多種多様な姿であらわされるネクベト女神であるが、細かなプロポーシオンに関する分析をおこなう必要があるために、本稿では特に両翼を拡げた姿に研究の対象を限定した。

第3章 確認したネクベト画像

観察をおこなった対象を、以下にリストとして掲げる。ゲベル・シルシラやセティ2世王墓などを除き、ほとんどすべての場所の踏査を執筆者がおこない、写真撮影がなされた。

神殿・葬祭殿：

- アメンヘテプ3世神殿（ルクソール、第18王朝末期）
- セティ1世葬祭殿（アビュドス、第19王朝初期）
- セティ1世葬祭殿（クルナ、第19王朝初期）
- スオス・アルテミドス（ベニ・ハサン、第18王朝建造、ネクベト画像は第19王朝）
- セティ1世ワディ・ミア神殿（カナイス、第19王朝）
- セティ1世小祠堂（ゲベル・シルシラ、第19王朝）
- ラメセス2世小祠堂（ゲベル・シルシラ、第19王朝）
- メルエンプタハ小祠堂（ゲベル・シルシラ、第19王朝）
- アブ・シンベル大神殿（アブ・シンベル、第19王朝）
- ラメセス2世葬祭殿（ラメセウム、ルクソール、第19王朝）
- ディール神殿（ヌビア、第19王朝）
- セティ2世聖船祠堂（カルナク神殿、第19王朝）
- ラメセス3世神殿（カルナク神殿、第20王朝）
- ラメセス3世葬祭殿（メディネット・ハブ、第20王朝）
- コンス神殿（カルナク神殿、第3中間期～グレコ・ローマ時代）
- アレキサンドロス大王聖船祠堂（ルクソール神殿、マケドニア朝）
- アレキサンドロス大王至聖所（カルナク神殿、マケドニア朝）
- プトレマイオス神殿（エル・カブ、プトレマイオス朝）
- オパト神殿（カルナク神殿、プトレマイオス朝）
- トト神殿（カスル・アル＝ゲーサ、プトレマイオス朝）
- ハトホル神殿（デル・エル＝メディーナ、プトレマイオス朝）

イシス神殿（フィラエ、プトレマイオス朝）

ホルス神殿（エドフ、プトレマイオス朝）

ハトホル神殿・他（デンデラ、グレコ・ローマ時代）

トトメス3世・ハトシェプスト小神殿（メディネット・ハブ、第18王朝建造、ネクベト画像はプトレマイオス朝）

アメンヘテプ3世神殿（エル・カブ、第18王朝建造、ネクベト画像はプトレマイオス朝）

セバク・ハロエリス神殿（コム・オンボ、グレコ・ローマ時代）

クヌム神殿（エスナ、グレコ・ローマ時代）

王墓：

セティ1世王墓（KV17、王家の谷、第19王朝）

メルエンプタハ王墓（KV8、王家の谷、第19王朝）

セティ2世王墓（KV15、第19王朝）

ラメセス4世王墓（KV2、第20王朝）

ラメセス6世王墓（KV9、第20王朝）

ラメセス7世王墓（KV1、第20王朝）

ラメセス9世王墓（KV6、第20王朝）

貴族墓：

センネフェル墓（TT96、第18王朝）

シーアメン墓（第26～30王朝）

ハゲワシの羽根だけが確認された場所：

アメンヘテプ2世アラバスター祠堂（カルナク、第18王朝）

アメンヘテプ2世の門（エレファンティネ、第18王朝）

第4章 ネクベト画像の資料

本論における説明に当たっては、ネクベトの各部名称をまず定めた。

カタログ化に当たっては、各遺構で写真撮影の場所を記入した平面図を写真とともに掲げ、またネクベトがどちらの方向を向いているかに関しても赤い矢印で表示した。

剥落が進み、ネクベト画像の確認が困難な写真については適宜、透明フィルムを用いたトレース図を作成した。ルクソール神殿の天井の場合の例を図1と図2に掲げる。

ネクベト画像の情報に関しては、「方向」、「首の向きと冠の有無」、「羽根の数と色彩及び形態」、「尾羽の数と色彩及び形態」、「シェンとダチョウの羽根の有無」、「胴体部の特徴」、「格子線の有無」、「下書き線の有無」といった項目を設けて記述をおこなった。

第5章 画像資料のデータ

観察、撮影した75地点のネクベト画像の中で比較的残存状態が良い61地点を時代順に、「進む向き」、「首の指し示す方向」、「被る冠の種類」、「黒羽」、「赤羽」、「尾羽の枚数」と「それぞれの形状」、「胴体部分の形状」、

「脚が掴むシェンと羽飾り」及び「特筆すべき点」などを記して表にまとめ、データベースを作成した。

また、斜めからの写真撮影を余儀なくされ、正確な記録ができなかった2か所を除いた59地点のネクベト画像の写真すべてを5ミリメートル間隔の格子に当てはめ、測定した数値を上記のデータベースに情報として加えた。さらに、この数値情報に基づき胴体幅を基準として翼の長さ、胴体高の比率を算出した。

すなわち、両翼を拡げた姿のネクベト画像におけるプロポーションの目安として、

全翼の長さ÷胴体幅＝翼比率

胴体高÷胴体幅＝胴体比率

の値を便宜的に求め、データベースにさらなる情報として加えた。



図1 ルクソール神殿、天井のネクベト画像

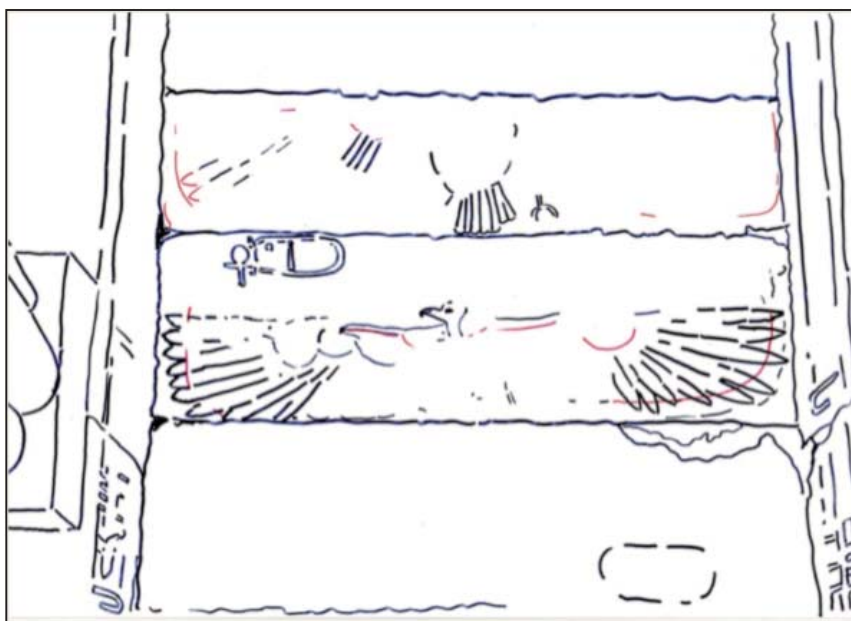


図2 ルクソール神殿、天井のネクベト画像、トレース

第6章 ネクベト画像の考察

前章において作成した資料に基づき、考察を進めた。

神殿などの天井には、ネクベト画像が第18王朝末期からその後、第19王朝初期のセティ1世の頃に盛んに描かれるようになり、新王国時代を通じて一定の形式があったことが了解される。ラムセス2世の頃には、黒羽の先端が横へと伸ばされるようなネクベトの形態に、いくらかの変化があらわれる。第20王朝のネクベト画像は、全体的に横へ伸ばされるようになるが、しかし形態にこのような変化は見られるものの、新王国時代末期まではアテフ冠を被り、黒羽は9枚で、脚はシェンを掴み、ダチョウの羽根飾りを持っている姿で描かれるという一定の規則性があったことは明らかである。

翼や胴体の比率の変化や、胴体部や首の描かれ方の変化が顕著になっていくのがプトレマイオス朝時代であり、それまでの規則性は見られなくなる。翼の内側に火炎を逆さまにしたような模様が施されたり、胴体部分には羽毛模様が水玉模様や幾何学模様で描かれたりと、ネクベト画像にデザイン性が加えられ、装飾が重視されるような変化がプトレマイオス朝時代に入ってからの特徴である。

その後、ネクベト画像は胴体部分の模様や内側翼にも模様が描かれながら、首の形状の渦巻きが深くなっていくという大きな変化を遂げた。その首にも、模様が施されていくような細やかな変化を見せながら、ローマ時代にかけてもネクベト画像は盛んに描き続けられたことが考察される。

第7章 ネクベト画像のプロポーション

ネクベト画像を描くに当たり、最初に引かれたと考えられる計画線が残存する例が見られ、こうした下書きの線を対象として、描写される順番を勘案しつつ、ネクベトを描く際の各部の割付を考察した。

エル・カブの2つの神殿の天井にうかがわれるネクベト画像には、赤い色で鮮明に格子線が残されている。時代はどちらもプトレマイオス朝であるが、ネクベトのどの部分を基準として線を引いているのかが推測され、興味深い。ネクベトの胴体の中央には縦に線が描かれ、これがほぼ左右対称に描写される両翼を上げたネクベト像の対称軸となっている。この対称軸と平行に、胴体の最大幅に接して引かれている線との距離は、ネクベト全体を覆う格子をなす小さな正方形の一辺と同じである。言い換えるならば、胴体の最も太い幅を2等分した長さが格子の基本単位となっており、その倍数によってネクベトの全高と全幅が定まっている。

格子の単位正方形を1コマとするならば、プトレマイオス神殿の場合、冠の上部の端から胴体の首の付け根までの長さが2コマ、胴体の首の付け根から尾羽の下部の端までの長さが4コマ、合計6コマがネクベトの全体の高さであり、また18コマがネクベト全体の幅となっている。アメンヘテプ3世小神殿の場合には、胴体の幅2コマに左右の翼の長さ14コマの2倍である28コマを加えた30コマの格子線が、このネクベトの全体の幅であった。一方、頭上のネクベトの尾羽との僅かなスペースと冠の上部の端から胴体の首の付け根までの長さが2コマ、胴体の首の付け根から尾羽の下部の端までの長さが5コマ、合計7コマがネクベトの全体の高さである。

中心線が残されているネクベト画像はアブ・シンベル神殿の列柱室天井、メルエンプタハ王墓、セティ2世王墓などでも見ることができ、同じように中心線と胴体の最大幅を規定すると思われる平行線が観察される。時代が遡っても、基本的な描き方はそれほど変わらなかった可能性が指摘されよう。

第8章 2か所に描かれたネクベト画像の比較

カナイスの神殿についてはSchottが実測平面図を伝えており、これに基づいて列柱室とその前室の身廊部天井に描かれたネクベト画像を詳細に検討することができた。円柱の内々寸法は180cmであり、角柱の

内々寸法は173cmである。円柱の天井においても角柱の天井においても柱の内側にネクベト画像が描かれており、内々の寸法がそれぞれのネクベト画像の大きさを規定していると考えられる。

分析の結果、円柱天井のネクベト画像の胴体幅は角柱天井のネクベト画像の胴体幅よりも広く、円柱部のネクベトの首の長さは角柱部のネクベトの首の長さよりも短い点が判明した。また円柱部の翼の幅は角柱部の翼の幅よりも短い。円柱部のネクベト画像はダチョウの羽根飾りを持っているが、角柱部のネクベトは持っておらず、円柱部のネクベト画像と角柱部のネクベト画像の羽根の描かれ方や枚数も異なっている。同じ神殿内で隣接した部屋で、同時代に描かれたネクベト画像であるにも関わらず、プロポーションや描き方が異なっている点が明らかである。

アビュドスのセティ1世葬祭殿にある第二列柱室には、第一列柱室に続いてネクベトが残されているが、ネクベトの下に通常は横にして持つダチョウの羽根飾りを描き入れる余地がないために、あえてネクベト画像の上から肩横に羽根飾りを縦に描くという手法が取られたネクベトが見られ、大変注目される画像となっている。天井の大きさに応じて描かれたネクベトの描法の特徴が看取され、さらなる研究の進展が待たれる。

第9章 The Main Chapel at the Amarna Workmen's Village の復元されたネクベト画像

アマルナにある職人たちの村の祠堂軒下飾りの真下に、ネクベト画像が描かれていた痕跡が見つかった。断片を接合して得られたその復元図が Weatherhead と Kemp によって発表されている。時代は第18王朝末であり、両翼を上げた姿の明瞭なネクベト画像として貴重である。

しかしここではラムセス6世の王墓天井のネクベト画像を参考とした点を述べており、再考を要するであろう。ネクベト画像を描こうとする建物の余白部分によって大きさとプロポーションが規定され、時代が同じであり、さらには隣接して形が似たような部屋であってもネクベトの姿はいくらか変えられる点について前章で触れた。しかしネクベトの姿は時代とともにプロポーションを変化させ、描法もまた異なっている。こうした点に注目するならば、描かれた時代を言い当てることのできるものであり、この章では第18王朝末期のネクベト画像の特徴に基づき、改訂案を試みとして提示した。

報告書の内容ではっきりしているのは、黒羽根の正確な数が分かっていないこと、そして全体のプロポーションが拙めており、ネクベト画像の翼の幅と高さの比率が1:3.3であることの2点である。まず本稿で作成したデータベースからアマルナ時代と時代が近い第18王朝末期、もしくは第19王朝初期に絞って該当するネクベト画像を探し出したが、その結果、第19王朝初期のセティ1世王墓のネクベト画像の比率が1:3.5という近い数値を持つことが判明した。このネクベト画像をもとに、第18王朝末から第19王朝初期にかけて特徴的な点を備えるネクベト画像が新たに描き起こされた(図3)。



図3 アマルナ出土のネクベト画像、改訂案

ネクベト画像の復元には、同時代で胴体比率の近いものを参考に用いた方がより妥当性があるとも考えられるが、第18王朝時代末に建築物に描かれたネクベト画像の参考資料が現時点では乏しく、今後の課題としたい。

結論

天井に描かれている両翼を上げたネクベト画像は、一見するとどれも同じようにもうかがわれるが、描かれた時代によって形態や表現方法にさまざまな変化が見られる。その変遷を具体的に明らかにすることを目的とし、ネクベト画像の考察を9章にわたっておこなった。

既往の研究は乏しく、このために各遺構をめぐって写真撮影を重ねる作業が強いられたが、得られた写真を資料化し、またデータベースを作成することで、様式の変遷過程をある程度、確定させることができた。またこうして作成された資料の応用として、WeatherheadとKempによるアマルナのネクベト画像の復元案に対し、改訂版が用意されるべきである点を指摘し、作成を試みた。

今回の観察で扱うことができなかったネクベト画像も含め、さらにこの観察結果と繋がる考察を続けて行くことを将来の研究課題としたい。

謝辞

本稿作成にあたりサイバー大学世界遺産学部西本真一先生に数々のご教示頂きました事末筆ながらこれを記して謝意を表したいと思います。

エジプト学研究 第19号

2013年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.19

Published date: 31 March 2013

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University